

はじめに

本レポートでは、「第五章 場所の政治的意味」で語られた「場所」の理論を環境活動の観点から考察するため、「諫早湾干拓事業」の事例を取り上げ検討し、環境活動においても「場所」の理論が有効であることを論じる。

検討の対象とする諫早湾は、有明海のうち、長崎県諫早市域の入江周辺を指す。干潟が発達し、これにより独特の生態系を有する地域である。古来より干拓が行われてきたが、1952年の「長崎大干拓構想」計画以降、紆余曲折を経て大規模な干拓が行われ、1997年には諫早湾奥部 3,550ヘクタールを全長 7キロの潮受け堤防で縮切った（『長崎県の地名』）。これにより深刻な漁業被害や環境被害が発生したと報じられ、堤防をめぐる社会問題へと発展した。

本レポートでは、「場所」の概念について、講義や教科書（山崎 2013）をもとに整理したうえで、諫早湾について、主に環境活動の点から考察する。

1 「場所」とは一講義内容をもとに

山崎は、空間を抽象的・一般的・客観的なもの、場所を具体的・個別的・主観的なものとし、場所は平均化されない固有の、大体不可能なものであり、それはそこで暮らす人々の日常生活によって「場所化」されるものであるとする。しかしこれらは二者択一ではなく、空間の均質性と場所の固有性は相互に関係し合い、その間の緊張関係が社会の動態を生み出す。このことを、山崎は「場所の政治」と定義している。

別の言い方をすれば、ある「場」はそこで暮らす人にと

ってはかけがえのない場所であるが、その「場」に縁のない人にとっては、他の類似の地域と変わらない空間と認識され、両者の「場」に対する考えや扱いの在り方は異なると予想される。つまり、「場」の内部から見るか外部から見るかによって、その場所性と空間性は変化し、その変化の差異が緊張関係に結びつくと考えられる。

山崎は、「場所の政治」研究の意義として、局地的な場所の価値を見出し、諸現象が全国化・グローバル化する流れにあって、局地的な条件のなかでそれを相対化し修正できることと、政治を通じて人間と地理的環境が密接に結びつくことを理解できるところを挙げている。

では、場所の問題を意識したうえで環境活動について検討することで、何が見えてくるだろうか。

2 諫早湾干拓事業と「場所」内での対立

諫早湾干拓事業はその計画内容を二転三転させながらも、最終的に潮受け堤防の縮切りが行われた。その経緯については、山下弘文によってまとめられている(山下 1994)ので、その成果に基づき改めて整理していく。

最初の諫早湾大開発計画が浮上したのは戦後間もない1952年であり、その目的は当時の緊急課題であった米の増産であり、秋田県八郎潟など各地で行われていた国営干拓事業の一環だった。しかしこの計画は減反政策などが進む中、有明海全体を縮切ろうと計画された「有明海総合開発計画」と共に幻となったと思われたが、長崎県は計画を練り直し、単なる干拓事業ではなく水資源開発を中心とした「長崎南部地域総合開発計画」を立案した。だが佐賀・福岡・熊本三県、長崎県島原漁民の反対運動の結果、1982年に中止となった。

1983年、干拓事業計画は縮小され、防災中心の新しい開発事業へと切り替えられたが、この事業は防災上の不備があったにも関わらず押し切られ、実行に至った。漁業関

係者への対応は、国からの補償金を受け入れる形で決着した。

この開発計画からは、当初は戦後の米不足解消のため、ほかの地域と同じ広大な干潟があるという理由から干拓を計画する、つまり諫早湾をほかの干潟と均質な空間として開発しようとする国と、実際に諫早湾に暮らし、その場所性を感じていた漁民たちとの対立が窺える。

では、同じ諫早湾に暮らしながら、海を利用する漁民とは違い、陸地を利用する農民は、この事業にどう対応したのか。

干拓事業による海の汚染が生活に直結する漁民とは異なり、干拓により土地が増え、利益を被る農民はしばしば干拓賛成派として漁民や環境活動家と対立するとされてきた。

しかし、鬼頭秀一（鬼頭 1998）によれば、地元の農民たちの立場も微妙なものであるという。諫早湾での近世以前に遡る長い干拓の歴史を検討すると、それまで定期的に行きつづけてきた比較的小規模の「地先干拓」は、1952年の大干拓構想を契機になされなくなった。農民たちは、生活のための小規模の干拓という最小限のインフラ整備をするためには、大規模な公共事業に頼らざるを得なくなってしまうという。地先干拓は干潟の自然を保持し、干潟との地域住民の様々なかかわりも保持されるが、干潟を消失させ、干潟とのかかわりをあきらめざるを得ない大型干拓事業を受け入れざるを得ない状況に追い込まれた農民たちは、自然保護派と対立的な存在になったとしている。

鬼頭の論からは、諫早湾を空間として扱った国の政策によって、本来そこを場所として共に暮らしてきた漁民と農民の関係が変化し、それぞれの生活のため、対立せざるを得ない状況へと追いやられたことがわかる。空間的な介入が、場所のあり方とせめぎ合い、変容させたのである。

3 「よそ者」による環境運動

2章では諫早湾を空間とみなし開発を行う国側と、諫早湾を場所と見なす部分では同じでありながら、国の開発により必要のない対立を起こしてしまった漁民と農民の関係性について検討した。3章では、同じく諫早湾を固有の場所と見なしているが、現地生活者ではなく、外部から環境運動を行う人たちと、内部で暮らす人々の関係性について検討する。

外部からの環境運動者については、諫早湾と奄美大島の「よそ者」を中心に、環境社会学の観点から検討を行った鬼頭秀一の研究（鬼頭前掲論文）がある。彼によれば、自然保護運動などの環境運動には、当該住民のほかに、特に都会などの地域外の「よそ者」が関わっている。そして特に開発問題をめぐる運動などの場合には、彼らの主張が当該地域の住民の利害と一見衝突しているように見えることは一般的であるという。彼ら「よそ者」は、当該地域の当事者の利害を越えた普遍的な環境活動の理念を掲げる一方、「地元」の開発賛成派の人たちが彼らに対して「よそ者」というスティグマを投げつける事例は枚挙に暇がないという。

鬼頭は、「よそ者」には①当該地域やその地域から地理的に離れたところに暮らしている人。②外から当該地域に移住してきて、その地域の文化や生活をよく理解していない人。③当該地域やその地域の文化に関わると自認する人たちによって「よそ者」のスティグマを与えられうるし、また実際に与えられている人。④利害や理念の点において、当該地域の地域性を超え、普遍性を自認している人。の4つが含まれるとし、「よそ者」概念は恣意的に定められ、「排除」を目的とした否定的な文脈で使われる概念であることが一般的であるとしている。

しかし④に見られるように、「よそ者」の持つ普遍性は、当該地域の地域的観点とは異なる環境運動への視点を与

える。また、「よそ者」の中には当該地域に強い愛着を持ち、地域の人たちから学ぶ事により、元々持っていた普遍的視点と地域的視点を併せ持つ人も存在する。彼ら「よそ者」の普遍的視点は、「地元」の人々の持つ地域的視点と有効に絡み合い結びつくことで、地域の環境意識を変え、環境運動の発展・成功に繋がっていくとしている。

筆者は、鬼頭の議論は環境運動を場所と空間のせめぎ合う「場」の問題として考える際に、重要な視点を示していると考えられる。場所（鬼頭のいう「地元」）意識を持って暮らしている現地の人からすれば、「よそ者」は場所外の存在であり、場所としての現地の現状を理解していない存在であるが、現地の人と関わり「場所化」することで、あくまで場所外の存在だった彼らが場所の人々に受け入れられ、環境運動の中心的存在となる。

環境運動を場所の観点から見た場合、こうした現地の人と外部の人との「場所観」の共有がその成功の鍵となっていることが窺える。

章の終わりに、場所の内外の人々が協力して環境活動に取り組んでいる例として、NPO法人「SPERA 森里海・時代を拓く」（NPO法人 SPERA 森里海・時代を拓く、2014）を紹介する。

このNPO法人は、2010年に結成された前身団体を経て、2013年に結成された。そしてその活動には、地元の漁師や高校生といった「地元」の人々のほか、「よそ者」である大学教授や院生といった研究者らが共同で参加しており、有明海周辺の自然環境の保全やシンポジウムなどの環境活動を行っている。これはまさに、諫早湾をはじめとする有明海をかけがえのない場所として集まった、「地元」と「よそ者」の協力の成功例の一つと評価する事ができるのではないだろうか。

おわりに

ここまで、諫早湾を中心に、空間としての開発を試みる国の介入により、同じく諫早湾を場所と認識しながらも対立を余儀なくされた地域住民について、そして場所外からの「よそ者」の普遍的な視点が環境運動の成功に不可欠であるということ、先攻研究を中心に考察した。

浅野敏久（浅野 2008）によれば、諫早湾干拓問題は「場所の意味をめぐる争い」であるという。「場所の意味をめぐる争い」とは、大規模な開発事業などを皮切りに、その対象との間に様々なかかわりを有している人々が、彼ら個人の「場所の意味」を問い直し、それらは次第に収斂し、最終的には収斂した「場所の意味」という価値観の対立となることを指しており、それは環境問題に普遍的に見られるという。

筆者はおおむねこの論に賛成であるが、その中には、それぞれの地域を場所としてとらえている人々の考え方や関わり方の違い、地域ごとの歴史的経過の違いが確実に存在しており、個々の環境問題を検討する際は、そうした地域特有の問題（例えば、諫早湾での魚民農民対立の背景など）にも、目を向けるべきであると考えている。

この指摘は
重要ですね

環境問題を場所という視点で見ることによって、空間として開発しようとする側と、場所として守ろうとする側の対立のみでなく、住民ごとの場所の考え方や活用の仕方、場所への根ざし方などが違い、そこでの意見の相違や対立が発生しうる事や、地域外からの活動家の「場所化」の過程やその意義などを検討でき、全国的に一様に起きている環境問題を、局地的な地域の「場所性」を通じて相対化することができると考えている。場所の視点は、政治・環境問題の他にも、経済・歴史など、様々な分野で応用できる検討方法であるだろうし、自身の研究においても、この視点を活用していきたい。（4250字）

参考文献

浅野敏久（2008）『宍道湖・中海と霞ヶ浦—環境運動の地理学—』古今書院。

NPO 法人 SPERA 森里海・時代を拓く（2014）『森里海連環による有明海再生への道 心の森を育む』花乱社。

鬼頭秀一（1998）「環境運動／環境理念研究における「よそ者」論の射程—諫早湾と奄美大島の「自然の権利」訴訟の事例を中心に—」『環境社会学研究』4、44-59頁。

山崎孝史（2013）『政治・空間・場所 「政治の地理学」にむけて』ナカニシヤ出版。

山下弘文（1994）『「干潟を守る懲りない面々たち」① 日本の湿地保護運動の足跡 日本最大の干潟が消滅する？有明海諫早湾』信山社出版。

『長崎県の地名』平凡社、2001年。

